

中学校若手教員のためのメンタリングを取り入れた授業改善

Research to Improve Lessons for Young Junior High School Teachers through Mentoring

大里 弘美・和田 治子（安芸高田市立美土里中学校）

OSATO Hiromi and WADA Haruko

キーワード：メンタリング・授業改善・中学校・若手教員・外国語科

In this study, we considered efforts to improve lessons through mentoring for young teachers who have little experience as teachers in junior high school. As a result, it was found that young teachers with fewer years of teaching experience may be able to continuously improve their lessons by taking measures that incorporate mentoring, the use of a mentor, who is an outside expert with expertise in the subject. However, the mentor listened to the mentee and felt that she was not able to fully draw out her independence, while the principal was able to fully respond to the daily subject-specific questions of the mentee. In addition, since the mentee had issues that spanned a few months, she felt that she had not been sufficiently improved.

1. はじめに

今日、中学校の現状はミドルリーダーを担う中堅教員数が少なく、大量退職に伴う若手教員の大量採用が進められている。また、社会の少子化により、学校の規模も縮小傾向にある。この現状は、若手教員がベテラン教員の授業参観をしたり、学校内での教科部会を持ったりすることが難しい状況を引き起こしている。管理職の中には、若手教員の授業力の育成について課題を感じている者も多い。

中学校の授業力の育成を図る際の課題となる事象として、「教科の壁」が挙げられる。中学校では、例えば研究主任、教務主任、教頭、校長等の知識や経験の豊富な者が授業づくりの基礎となる板書や発問等についての助言はできるが、各教科独自の指導法などへの助言は難しい状況も見受けられる。

本研究の対象校ではいくつかの授業改善の取組を行っている。対象校の教員の意識調査から中学校教員が求めている授業改善の在り方についてアンケートをした結果、教科の専門性のある外部有識者や指導主事による授業への指導・助言が授業改善に役立つと捉えている若手教員が多かった。

そこで、本研究では若手教員の担当教科の専門性のある外部有識者をメンターとし、メンタリングの考え方を取り入れた授業改善を行い、その成果と課題を考察する。

2. 研究の考え方

(1) 教員の求める授業改善の在り方

研究対象校では、いくつかの授業改善の取組を行っている。研究対象校の教員に、それらの取組の有効性についてどのように感じているかアンケートをとった。アンケートの質問項目は次のとおり。

【授業改善の取組に関するアンケートの質問項目】

- 1 これまで行ってきた授業改善の取組の中で、特にご自身の授業改善に有効であったと感じておられるものから順番に番号をお書きください。
- 2 1で1～3の順番をつけた取組が有効であったと考える理由をお書きください。

表1・2にアンケート結果を示す。

表1 授業改善の取組に関するアンケート項目1の結果 は教員経験年数

	授業改善の取組内容	24	22	17	13	5	4	3	2
ア	モデル授業から学ぶ生徒への指示・発問の在り方	1	4	3	5	2	2	4	3
イ	教員グループによる授業参観と気づきの交流	2	5	2	1	3	1	3	5
ウ	休校期間中の模擬授業		3	5	4	5	5	5	4
エ	管理職からの指導・助言	3	1	1	2	4	3	2	2
オ	外部有識者・指導主事等からの指導・助言		2	4	3	1	4	1	1

表2 授業改善の取組として有効であったと考える理由（アンケート項目2）

	有効であると考えられる理由（ <input type="text"/> ）は教員経験年数
ア	<ul style="list-style-type: none"> ・視点を決めて動画を見ることで、自分に取り入れたい取り組み内容が実施されている場面に気づくことができる。(24) ・自分自身の知識やアイデアをもらえるから(17) ・イメージができて授業に取り入れやすい(5) ・見習うポイント等も説明があるため、分かり易い。(2) ・全教科で共通する指示、発問の仕方をモデルを通してみることで、自分の授業でのイメージがしやすかったから(4)
イ	<ul style="list-style-type: none"> ・他の職員の良い点や工夫を多く見ることができる。実際の授業で悩んでいる点についても改善のヒントや意見をもらうことができるから。(24) ・客観的なアドバイスをもらえるから。(17) ・気づきを出し合うことで次の授業へのチャレンジしたい課題を考えることにつながる。(13) ・生徒の姿や反応等、生徒把握につながる。(13) ・他の教科の授業での生徒の様子が分かる。先生たちの発問の仕方や指示がとても参考になる。(5) ・実際の自分の授業に客観的な指導の改善点を指摘してもらうため。(3) ・具体的な指示の出し方や板書の工夫など、学ぶことがあるから。(4)
ウ	<ul style="list-style-type: none"> ・本校で統一して取り組む内容を確認できたから。(22)
エ	<ul style="list-style-type: none"> ・イの取組より深い部分の取組に対するアドバイスがもらえるから。(24) ・管理職と専門が同じ教科であるため、教科指導における生徒指導のポイントの指導をもらったから。(17) ・具体的に自分の授業を見て指導もらえるので分かり易い。(22) ・自分の授業の振り返りと改善につながる(13) ・管理職は生徒の状況も把握しているのでためになる。(2) ・生徒の様子から指導の改善点を教えてもらえる。(4) ・学校全体で確認している授業改善の視点でアドバイスをいただけるから。ビデオ撮影も取り入れ、後から客観的に見直すことができること。(3)
オ	<ul style="list-style-type: none"> ・指導主事(市教委)の指導は一貫していて具体的である。本校の取組が市の取組とリンクしていることが実感できる。(22) ・指導主事(市教委)の指導は生徒の行動や発言の理由等ヒントを感じる学びがあり、自己の改善を考える機会となった。(13) ・教科の具体的なアドバイスがあるので、今の自分の授業に足りないことが明確になる。(5) ・教科によって学習指導要領で求められる力の変化があるので、教科の専門的な視点からの指導はありがたい。定期的な助言がほしい。(2) ・専門的な指導があること(3)

表1から教員経験年数10年未満の4人の教員の内3人が、最も有効であった授業改善の取組として教科の専門性のある外部有識者や指導主事等からの指導・助言を挙げている。それを選んだ理由を見てみると、教科の具体的なアドバイスや専門的な視点からの指導があることを挙げている。

一方、5つの選択肢の内、半数の教員が5番目の順位をつけているものは、休校中の模擬授業であり、他の取組が実際に生徒を対象とした授業を扱ったものであることに対し、この取組は生徒を対象としていない。表2の管理職の指導・助言が有効であった授業改善を選んだ理由を見てみると、生徒の様子や反応、発言に基づいた指導・助言があったことを挙げている教員経験年数の少ない教員が複数いる。

これらのことから、研究対象校の教員経験年数の少ない教員は、自分の授業に対する教科の専門的な指導・助言と生徒の様子や反応に基づいた指導・助言が授業改善に有効であると捉えているといえる。

(2) メンタリングについて

研究対象校の教員経験年数の少ない教員は、自分の授業に対する教科の専門的な指導・助言と生徒の様子や反応に基づいた指導・助言が授業改善に有効であると捉えていることから、メンタリングの考え方を取り入れた授業改善の取組を行うこととした。

①メンタリングとは

本田（2000）によると、メンタリングとは、「知識や経験の豊かな人々（＝メンター）が、現時点でまだ、未熟な人々（＝メンティー）に対して、キャリアや心理・社会的な側面から継続して行う、キャリア成功を目的とした一定期間の支援行動を意味する」と示している。学校内で行う人材育成の方法として「OJT（＝On the Job Training）」が使われることが多い。このOJTとメンタリングの違いについて表3に示す。

表3 メンタリングとOJTの違い（本田：2000）

	OJT	メンタリング
活動の目的	担当業務の遂行	人生、キャリア目標の達成
活動の効果	業務遂行能力の向上	キャリア成功の達成
活動上の関係	上下関係	共に学習し、成長する
活動の内容	スキルの伝承	自立に対する支援行動
活動の連鎖	組織の上から下へ	個人から組織、社会全般へ

本田（2000）によると、OJTの主目的は、現在担当する業務を遂行するために必要な知識・態度・スキルを獲得することであり、一方、メンタリングは、むしろ個人の将来的なキャリア形成を促進するために必要なあらゆる知識・能力・スキル・情報・機会を提供するものとしている。つまり、メンタリングは、その教員の将来的なキャリア形成を目的とした人材育成といえることができる。

また、本田は、コーチングとメンタリングの関係について、コーチングは、自分が知識・経験を持たない領域でも、効果的な質問などにより、相手の可能性を引き出し成果を高めていくコミュニケーション・スキルの応用行動例だとし、メンタリングのキャリア支援機能の一部だと述べている。

②メンタリング行動について

本田は、メンターがメンティーに対して行う具体的な支援行動や配慮の全体をメンタリングであるとし、特に、成果につながる、具体的で目に見える行動をさして「メンタリング行動」は2つの

支援行動の領域と、それを支える5つのスキルによって構成されていると述べている。

2つの支援行動の領域とは「キャリア的機能」と「心理・社会的機能」の領域である。大まかな内容を図1に示す。

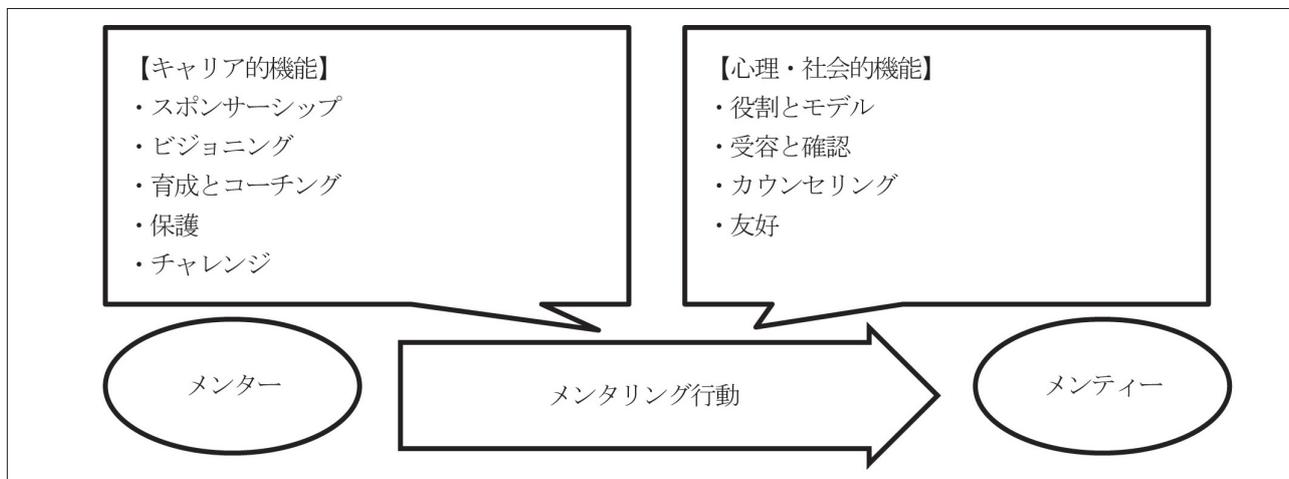


図1 メンタリング行動と2つの支援行動領域の関係

また、上記の2つの領域を支える5つのスキルの概要は次のとおりである。

【メンターの5つのスキル】 本田：2000 を参照

① ビジョニング

- ・組織の価値観に沿ったビジョニングをするために、上司の育成目標を確認する。
- ・達成可能な範囲でのビジョンをメンターとメンティーが協働して描く。

② パフォーマンス

- ・ビジョン達成のために必要な育成課題を考える。
- ・課題の優先順位をつける。
- ・課題達成の計画を立てる。
- ・毎月の課題から、毎日の行動の動機付けをさせる。
- ・現状とビジョンのずれを検証する。

③ フィードバック

- ・行動変容が可能であるフィードバックを適切なタイミングで与える。

④ カウンセリング

- ・メンティーの言うことを、相手の立場に立って、そのままきくことによって、相手の主体性を引き出す。

⑤ レビューイング

- ・メンティーの学習を定期的に確認する。

本研究では、このメンタリングの考え方を参考して、外部有識者として筆者がメンターとなり、教員経験年数の少ない英語担当教員をメンティーとして授業改善を行うこととした。

3 研究対象校における授業改善の実際

(1) メンタリングの考え方を取り入れた授業改善を行うチームと役割

次に研究対象校におけるメンタリングの考え方を取り入れた授業改善を実施するにあたり、研究対象校の管理職（以下、校長と記載する）とメンティーとメンターの3者でチームを組織した。

また、それぞれの役割（本田：2000を参照）を次のとおり設定し、3者で確認した。

① 校長

- ・メンティーに、指示命令、評価を行う。
- ・メンターに支援を依頼する。
- ・職場に「相談できる環境」をつくる。
- ・メンター、メンティーとオープンなコミュニケーションを保つ。

② メンティー

- ・自立した教員に成長するという強い意志をもつ。
- ・校長、メンターと決めた計画、課題を実行する
- ・校長及びメンターとオープンなコミュニケーション（報告・連絡・相談）を保つ。

③ メンター

- ・「相談できる人」として、キャリア成功の支援を行う
- ・育成課題を中心に、コーチング、カウンセリングを行う。
- ・校長及びメンティーとオープンなコミュニケーションを保つ。
- ・メンティーの秘密を守る。

(2) メンタリングの考え方を取り入れた授業改善

6月から11月の間に5回のメンターによる授業観察と授業の振り返りを行った。メンターは、第1回の授業観察実施前に、校長にメンティーの育成目標を確認した。その上で、メンターはメンティーがイメージするビジョンと、校長のメンティーの育成目標をすり合わせ、メンティーの授業改善のビジョンを設定した。

① ビジョンング

- 生徒が英語の授業に意欲的に取り組むことができるようにする指導力をつける。
- 生徒に5領域（「聞く」「読む」「話す（やり取り）」「話す（発表）」「書く」）における英語力を身につけさせることができる指導力をつける。

② 実施期間

2020年6月11日から2020年11月18日

③ 対象学級

研究対象中学校 第2学年 19人

④ メンタリングの実際

各回の授業後の協議において、メンターとメンティーで前回の課題のレビューを行い、当日の授業のフィードバックを行うことで課題の明確化と取り組む優先順位を検討した。その際、メンターは課題への取組の状況や悩み等をメンティーに問うことで、主体的に自らの授業における課題への取組がどうであったかを振り返る機会を与えるように意識した。次に、各回の課題設定と課題改善の状況について示す。

【6月10日実施の授業におけるパフォーマンスとカウンセリング】番号は優先順位

- ① 本文内容におけるQ & Aで、日本語でのやり取りになっている。
→本文内容におけるQ & Aは英語で行い、英語でのやり取りの力を育成すること
- ② 単語を黒板に書いている。
→単語はカードやプレゼンソフト等を活用し作成しておき、授業のテンポを崩さない。
- ③ リスニング問題を行い、その時間に答え合わせをしない。

→問題等を実施したら、その時間に答え合わせをし、生徒が自分の間違いについて正確に理解するようにしておく。

- ④ 生徒の書いている学習活動での間違いを見過ごす。

→生徒が書いている学習活動をしている際は、机間指導を行い、個別に指導や助言を与える。

【6月10日実施の授業における課題のフィードバックとレビューイング】

7月31日授業では、②③④は改善されていた。①の本文内容におけるQ & Aの答えが英語ではあるが、単語での解答に留まっている。

【7月31日実施の授業におけるパフォーマンスとカウンセリング】

- ① Q & Aの答えを単語で解答する。

→単語で答えた場合は教員が文にして、全員でリピートさせる。できるだけ主語と動詞のある文で答えるよう指導する。

- ② 1文を正確に書く学習活動や生徒同士が英語でやり取りする学習活動がない。

→帯活動で1文を正確に書く活動と生徒同士が英語でやり取りする学習活動を設定し、5領域のバランスをとった指導を意識する。

- ③ CDを聞かせる際に、聞く目的を指示していない。

→活動を行う場合は、活動の目的を活動前に説明・指示する。

【7月31日実施の授業における課題のフィードバックとレビューイング】

8月5日実施の授業では、①②③は改善されていた。

【8月5日実施の授業におけるパフォーマンスとカウンセリング】

- ① 教科書本文の音読の際、はじめから文単位でリピートさせたため、本文のリポートができていない生徒がいた。

→一語読み→スラッシュ読み→一文読みなど順を追って生徒の実態に応じて段階的に音読練習をさせる。

- ② 新出文法を導入する際の例文が長く、生徒になじみのない単語が使用されている。

→新出文法を導入する際は、生徒の実態に応じて基本的なものから発展的なものに移行する。その際、教科書の基本本文や練習問題を確認し、例文の難易度を検討する。

- ③ 生徒の言語活動の時間が少ない。

→教師の指示・発問を精選する

- ④ 板書に基本本文等、授業の展開で行う言語活動のヒントとなる文が示されていない。

→構造的な板書を行う。「消えてよいもの」は電子黒板に提示、「生徒の学習の手がかりのために残しておくもの」は黒板に提示する。

【8月5日実施の授業における課題のフィードバックとレビューイング】

9月29日実施の授業では、①④は改善されていた。

【9月29日実施の授業におけるパフォーマンスとカウンセリング】

- ① 生徒の言語活動の時間が少ない。(継続課題)

→教師の指示・発問を精選する

- ② 新出文法を導入する際の例文に扱われている単語が生徒にとって難しい。(継続課題)

→新出文法を導入する際は、基本的なものから発展的なものに移行する。その際、教科書の基本本文や練習問題を確認し、例文の難易度を検討する。

- ③ 音読を発表させた際、教師からのフィードバックがなかった。

→音読などパフォーマンスを行わせたら、その場で何がよかったのか、何が課題なのか具体的に

なフィードバックを行う。

- ④ 生徒が表現したいことを教師に日本語でたずねた際、教員が英語に変換するのみであった。
→生徒が言いたいことを日本語で引き出したら英語に変換し、全体にリピートさせる。辞書をもたせ、自己表現を調べながらできるようにする。

【9月29日実施の授業における課題のフィードバックとレビューイング】

11月11日実施の授業では、①が改善されていた。

【11月11日実施の授業におけるパフォーマンスとカウンセリング】

- ① 口頭で自己表現したものを書く活動につなげたものがない。
→口頭で自己表現したものの中から、いくつかを書く活動につなげ、文字を通して文構造等を認識させる。
- ② プレゼンで映し出されたものを日本語で何かを考えさせている。
→「教えること」と「考えさせること」の区別をクリアしておく。英語科において「考えさせること」は英語を通して考えさせるか、何かを伝えるための英語表現を考えさせることである。
- ③ 新出文法を導入する際の例文に扱われている単語が難しい。
→新出文法を導入する際は、基本的なものから発展的なものに生徒の実態に応じる。教科書の基本文や練習問題を確認し、例文の難易度を検討する。
- ④ 生徒をほめる場面が少ない。
→個人での発表の場を仕組むなどして、ほめる機会を増やす。例えば、授業開始後の1文ライティングの文を発表する、音読を発表させるなど、簡単なことから始めて、1分間チャットなどをペアで発表させるなどして、ほめる機会を意図的につくる。

(3) 生徒の変容

メンタリングの考え方を取り入れた授業改善の事前と事後で生徒の意識調査を行った。その結果を表4と図2に示す。

① 調査時期

事前調査 2020年6月3日, 事後調査 2020年11月17日

② 調査対象

研究対象中学校 第2学年 19人

表4は、生徒が回答した具体的な学習内容の一部である。

表4 英語学習に対する意識調査(2学期中間試験 平均:64.95点, 実施日:2020年10月15日)

質問内容「効果があった英語学習は何ですか。(複数回答可)」

()内は2学期 中間試験得点	事前	事後
生徒A (93)	・家で音読してみた ・たくさん練習した ・調べながらやった	・毎日ペアトークをしたから言えるようになった ・自己表現の時に先生にたくさん聞いたりして書くことができた
生徒B (85)	・教科書を読んだ ・分からない文は調べた	・毎日、音読をやったかがあった ・ペアトークがしっかりできるようになった
生徒C (77)	・単語テストの前日は出る単語を勉強した	・毎日、繰り返し読んだから自信をもって言えるようになった ・少しずつ単語を書けるようになった
生徒D (61)	・英検のために過去問にとりくんだ ・単語テストのためにがんばった時もあった	・前にヒントがあったので、ペアトークがやりやすかった
生徒E (20)	・聞き取りをがんばった ・大まかな話を理解できるようにがんばった	・毎日、音読やペアトークを繰り返したからできた

授業改善開始時のメンティーの授業改善のビジョンは、「①生徒が英語の授業に意欲的に取り組むことができる指導力をつける。」「②生徒に5領域（「聞く」「読む」「話す（やり取り）」「話す（発表）」「書く」）における英語力を確実に身に付けさせることができる指導力をつける。」であった。

表4の生徒が回答した「効果があった英語学習」を見てみると、2学期中間試験において得点が平均以上、平均程度、平均以下のどの層の生徒も、授業善実施前は、自分が家庭学習等で取り組んでいることを記載している生徒が多かったが、取組後は84.2%の生徒が授業で行ったことを記載している。また、自分ができるようになったことを記載している生徒が89.4%であった。このことはビジョン①「生徒が英語の授業に意欲的に取り組むことができる指導力をつけること」ができつつあることを示している。

また、図2は「読むこと（音読）」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の領域に関する生徒の意識（質問項目1～4）と英語の学習への意欲に関する生徒の意識（質問項目5・6）に関するアンケート結果である。それぞれ「4 とても当てはまる、3 当てはまる、2 あまり当てはまらない、1 当てはまらない」の4選択肢から自分の状況に当たるものを1つ選ぶアンケート形式とした。図2の縦軸数値は、生徒が選んだ選択肢の平均値を示している。

質問項目1～4の各領域に関する生徒の意識はどの領域も授業改善実施後の方が、肯定的な選択肢を選んでいる生徒が増えている。また、「英語の学習が好きである。」の質問に肯定的に回答している生徒の割合も増加した。

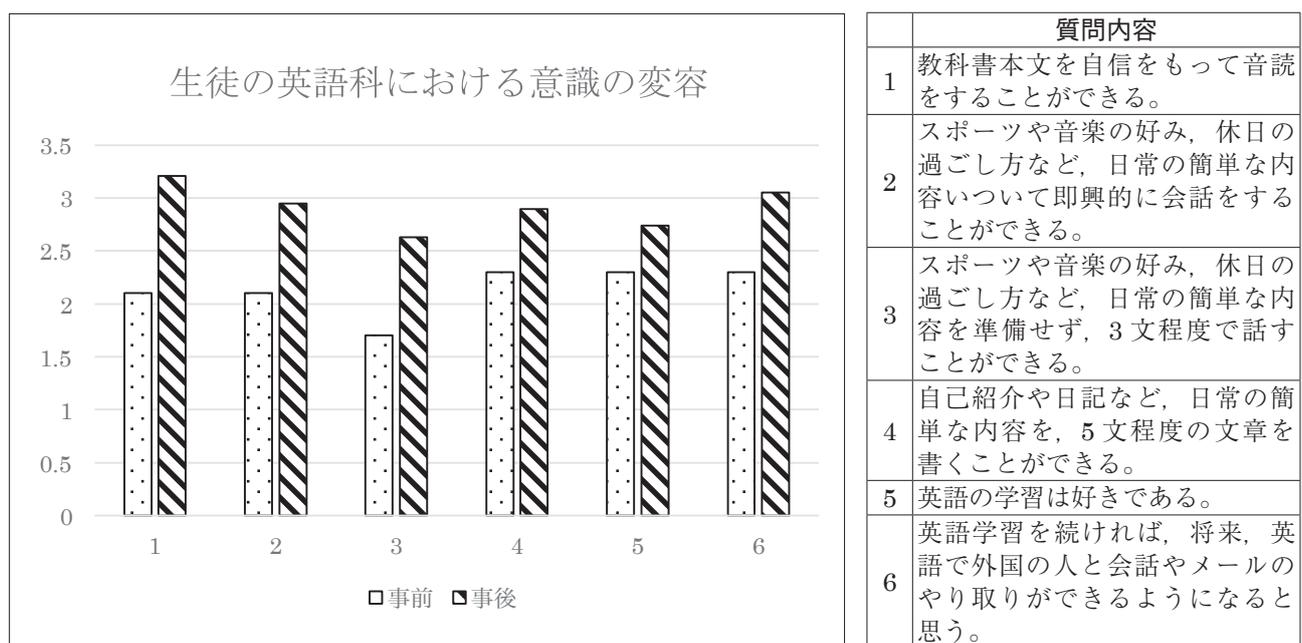


図2 生徒の英語科における意識の変容

(4) 3者が感じるメンタリングの考え方を取り入れた授業改善の成果と課題 (○成果, ▽課題, ◇改善策)
【メンティーの感想】

○課題を明確にし、その課題に対しての改善策をメンターと一緒に考えてもらったので、自信をもって行うことができた。また、そのことにより、授業中の生徒の様子も変わり、積極的に取り組むようになった。その要因として、自分の授業の課題が把握しやすく、具体的な改善策を立てられたことが考えられる。その結果、生徒の理解度（定期試験の平均点）も上昇し、英語学習への意欲の向上につながっている。

▽毎月の授業後の協議の際に、前回の課題が改善されているかメンターから確認があるが、優先順

位 2 番以降のもの、特に生徒の言語活動が少ないという課題は、複数回（複数月）に渡って課題であった。

◇毎月の課題を自分の見えるところに貼っておくなどして、複数の課題の改善ができるようにする。

【校長の感想】

○教員は担当教科が異なる教員（管理職を含む）からの授業改善への助言を前向きに捉えられない場合がある。メンティーは、メンティーの担当教科の専門性のあるメンターからの助言について納得感をもって受け止めることができていた。

○授業後の協議でメンティーの困り感をメンターが聞く場が設定されていたことにより、メンティーが自分の授業を客観的に振り返ることに繋がった。

○概ね月 1 回の継続的な授業参観と協議において、前回の課題改善の進捗状況確認とその回の課題設定を行うことによって、メンティーは課題意識をもって日々の授業に取り組むことができた。

▽校長が週数回授業観察を実施する際に、授業改善へのメンティーの思いを引き出しながら助言を行っているが、教科独自の質問に十分なフィードバックを与えることができていない。

◇メンターにメール等を使用し、メンティーからの教科特有の質問に助言してもらうよう依頼する。

【メンターの感想】

○メンティーの授業には課題が複数存在した。複数の課題の中から重点課題を決めて、毎月、重点的に取り組み、改善状況について授業参観をして確認することで、メンティーの授業改善に結びつけることができた。これは、一ヵ月後の重点課題のレビューイングの際に、フィードバックを行ったことが効果的であったと捉えている。

○毎月具体的な課題を設定することにより、メンティーは毎日の授業における行動改善のポイントを意識することができたと捉えている。

▽カウンセリングに関しては、電話で行うこともあったが、メンティーとメンターの都合が合わない場合も多く、授業観察時の授業後の協議が中心のカウンセリングになった。

◇週に数回授業観察実施している校長にカウンセリングの役割を担ってもらう。その際、毎月の重点課題についてメンターから校長に説明し、共有しておく必要がある。

上記のことから、メンティー、校長、メンターとも、メンタリングを取り入れた授業改善の取組が有効であると感じている。

しかし、校長とメンターは、メンティーの教科特有の悩みや質問に十分に対応できていないと感じている。また、メンティーは、課題によっては複数月に渡る課題もあることから、日常的に意識して取り組んでいない課題もあると捉えている。

4 まとめ

本研究では、中学校における教員経験年数の少ない若手教員に対して、メンタリングを取り入れた授業改善の取組を考察した。

その結果、教科の専門性のある外部有識者をメンターとしたメンタリングを取り入れた取組をすることで、若手教員の授業改善を図ることができる可能性があることが分かった。

しかし、メンターはメンティーの主体性を十分に引き出せていないと感じ、一方、校長はメンティーの日常的な教科特有の質問について十分に対応できていないと感じている。また、メンティーは十分に改善の進んでいない課題も残っていると捉えている。

今後は、校長とメンターでメンティーの課題を共有し、校長が日常的な授業参観後、課題に焦点

をあてた質問をメンティーに問いかけることで、メンティーが主体的に自らの授業における課題がどうであったかを振り返る機会を与える。そうすることで、メンティーが日常的に課題を意識をすることにつながっていききたい。

【参考文献】

- 本田勝嗣. (2000). 『メンタリングの技術』 東京：オーエス出版
- 三上明洋. (2010). 『ワークシートを活用した実践アクション・リサーチー理想的な英語授業を目指して』 東京：大修館書店
- 佐野正之. (2005). 『はじめてのアクション・リサーチー英語の授業を改善するために』 東京：大修館書店
- 三上明洋. (2007). 「アクション・リサーチ支援としてのメンタリングの進め方」『語学教育部ジャーナル 2007No. 3』 pp169 - 180
- 渡辺かよ子. (2009). 『メンタリング・プログラムー地域・企業・学校の連携による次世代育成』 東京：朝日出版社
- 笠島準一他. (2016). 『NEW HORIZON2 English Course』 東京：東京書籍
- 文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』 東京：開隆堂出版
- 文部科学省. (2020). 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 外国語」東京：国立教育政策研究所教育課程研究センター

〈キーワード〉

メンタリング・授業改善・中学校・若手教員・外国語科

大里 弘美（現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコース）

和田 治子（広島県安芸高田市立美土里中学校）

（2020. 12. 02 受理）